

フクシマ：津波伝説

事故は安全上の欠陥と地震が原因

2011年3月11日、安全上の大きな欠陥と地震が原因で福島第一原発において原発事故が起きました。

世界には、地震の危険のあるところに（比較的保護されずに）原発がたくさん立地しています。アジア、アメリカばかりか、ヨーロッパなど世界の至るところで、地震から原発事故が起こる可能性があります。

津波伝説

原子力産業は莫大な利益を失いたくないので、世界中ですべての原発を廃炉にしようという動きが出てくるのを恐れています。そのためフクシマ事故後すぐに、大きな原発事故を引き起こした一番の要因は地震ではなく、津波だと情報操作してきました。一般公衆に対して、世界のどこを見てもありそうもない14メートルの『巨大津波』の写真が示されます。しかし日本政府の公式報告書をよく見ると、原発を襲った津波は約8メートル程度と推定されていることがわかります。さらに、津波による損害だとして具体的に記録された証拠は今日までまだ提示されていません。

一つは：安全上の大きな欠陥

フクシマでは組織的に原子炉安全のイロハに反し、数々の理由から安全系が停止する事態になりました。安全系が空間的、系統的にも十分に隔離されていませんでした。技術的に異種のバックアップ系が少なすぎました（冗長性、多様性の不足）。2号機と3号機には、海水を利用する以外に原子炉の崩壊熱を非常用復水器を使って大気へ逃がす可能性がありませんでした。

もう一つは：地震

3月11日14時46分に地震が起こった後、15時8分、15時15分、15時25分に大きな余震が起っています。それが事故の経過に影響を与えた可能性があります。15時6分、東京電力の東京本社では対抗措置の可能を探るため地震による損害の検討が開始されます。

公式の報告書によると、事故は最初の地震によって1号機から3号機の3つの原子炉において原子炉自動停止、外部電源喪失、タービン自動停止、主蒸気管と主冷却水系から海水に導く熱送りの遮断（主蒸気閉鎖スクラム）へと経過しています。

1号機：早い時期に炉心溶融

東京電力のデータによると、1号機では高圧注水系

（HPCI）が津波によって停止したとされています。しかし、非常用復水器の停止は安全に抑えなければなりませんでした。非常用復水器は冷却が早すぎて稼働後わずか11分後の15時3分に停止します。15時17分直前まで原子炉内の圧力が急上昇しています。その後何が起こったのか、東京電力がこの時点から主なデータを公開していないのでわかりません。1号機で事態が急展開していたのは間違いありません。緊急措置をもう実施できず、炉心が溶融します。シビアアクシデントが起こってしまいます。

2号機：機能不能状態

2号機では、津波がくる前の3月11日15時31分に高圧注水系（HPCI）が短絡のために使用できなくなります。原子炉隔離時冷却系（RCIC）も3月14日に機能不能になります。炉心露出後に開始されたので、緊急措置は効果がありません。シビアアクシデントはもう避けることができません。

3号機：蒸気圧不足

3号機では、3月12日11時36分に想定外にも原子炉隔離時冷却系（RCIC）が停止します。高圧注水系（HPCI）が稼働していましたが、炉心冷却によって蒸気圧が10バール未満に下がって稼働できなくなり、3月13日2時42分に停止してしまいます。消火ポンプで緊急措置を講じますが、ポンプの稼働時には蒸気圧が約40バールにまで上昇しています。シビアアクシデントになってしまいます。

必要な結論

世界には、それぞれの立地場所で現実に予想される地震に対して安全系にいろいろ弱点のある原発がたくさんあります。

稼働中のすべての原発には一応安全上のリザーブが設けてあります。しかし、冷却水の量が少ない、電源供給の系統数が少ない、異種のパッシブ式安全設備がない、空間上の隔離が不十分（冗長性、多様性）など十分な余裕がありません。

チェルノブイリとフクシマの原発事故からは、世界中にある原発はすべて停止されなければならない、という結論しか出てきません。

詳しくは: www.fukushima-disaster.de

これは、DNR、IALANA、INES、NatWissと合同のIPPNWのアクションです。

編集：ヘンリック・パウリツ（責任）、ライナー・ブラウン、エヴァルト・ファイゲ、ヘルムート・レッシュアイゼン、ラインホルド・ティール、アンゲリカ・ヴィルメーン、ルーカス・ヴィアル

発行者：IPPNW（核戦争防止国際医師会）ドイツ支部、Körtestraße 10, D-10967 Berlin, メール: kontakt@ippnw.de, HP: www.ippnw.de.